



## 第 1193 回例会報告

平成 22 年 9 月 30 日(木) 雨

### 会長挨拶

会長 長崎政直

#### 国際奉仕について

今日の例会は、諏訪二葉高校の柳沢由衣さんをお招きして、今年の夏休みに、セブ島でデイケア・センターで日常生活習慣を教えているアリタさんの所にホームステイし、ボランティア活動をしてこられた体験や感想をお聞きする例会です。アリタさんの活動に対しては、諏訪湖ロータリークラブでも、支援金を毎年送り、お手伝いをさせていただいています。

さて、私たちの国際奉仕、援助活動ですが、ウィリアム・イースタリーというニューヨーク大学の教授が、「傲慢な援助」という本の中で課題を上げています。

**第1の課題**は、「経済発展を実現する原動力は、間違いなく自助努力だ。援助の役割はそれを側面から支援することだ。」というのです。セブ島の人々が、この貧困から抜け出す、スクワーター(貧民街)から抜け出す強い欲求と、意思がなければ、難しいということです。

諏訪湖ロータリークラブのセブ支援に中心的に関わってこられた小松さんやセブ島に工場進出している西澤さん達の見方は、セブ島の人々に、それを求めるのは難しいというあたりでしょうか。いずれにせよ、永遠に物やお金を与え続けることは難しいことです。セブ島の人々が自立することを援助することが、より良い支援ということになると思います。そうした意味では、西澤さんのようにセブに工場を作り、そこで利益を上げることだけではなく、人を育てていくという援助、また、諏訪湖 RC の幾人かのメンバーがやっているジブニーの買取、貸与等の支援は、自立を支援するもので、「自利・利他円満」の条件にも見合うものだと思っています。溝口先生におかれては、その自利の大半が、さらに盲目の奨学生の奨学資金に使われてきました。今後、他のメンバーの「自利」に関わる部分がどう

いう展開をしていくのか大変興味深いところです。

さらに、こうした視点から、今年国際奉仕委員会事業に組み込まれている「セブ等のプライマリースクール(小学校)の机や椅子の補修」という現地で依頼された援助が、単に私たちが資金を出して、現地の業者が請け負ってやるのではなく、材料、機器についてはこちらで提供し、それを使って学校関係者が補修をするというような現地のボランティア活動が組み込めたら、そこに「自立の芽」がでてくるのではないかと思います。しかし、はたしてそんなにこちらの思う通りに進めることができるか課題です。

**第2の課題**ですが、資金が援助を受ける国の中央政府を通してでは、本当に必要とされる人々に、大半が届くと考えるのは非現実的で、その国の指導者、及び重層的にそれに連なる政治家・官僚たちが、間で大半の資金を抜いている。それでは、どういう援助が良いかということ、本当に困っている人達に、物資やお金が直接届く方法で援助をすることが大事だと言うのです。菅総理大臣が国連で7200億円近くの援助を約束しましたが、こうした現実にあって、その資金はどう使われるのだろうか、これもまた興味深いものがあります。

国際ロータリーで提唱する WCS、マッチンググラントによる援助、そしてその線上での私達諏訪湖ロータリークラブの援助は、そうした意味では、本当に困っている人達に物資が直接届いていますから、そうした懸念は少ないと思われます。

それもセブ島にいる西澤君の会社の女性スタッ

#### ■ニコニコ BOX

26名	31,000円
累計	367,000円
目標額	130万円
達成率	28.2%

#### ■今週のことば

柳沢由衣さん、  
本日はよろしくお祈りします。  
長崎政直

#### ■出席報告

会員数	35名
出席対象	35名
出席者数	27名
出席率	77.1%
前回修正	82.8%

#### ■次回のプログラム

10月19日  
社会奉仕委員会  
担当例会



フや弁護士ダニロ、多少の不安がありますが、現地ロータリークラブがあればこそだと思っています。

ともあれ、援助の原点である、極貧の人々にとって、薬品や、改良品種の種、肥料や教科書の供与、道路、井戸、水道、看護婦、医師の派遣等はすぐに役立つ援助です。本当に困っている人達に、まるまる届くシステムが必要だと思われます。そしてその中に、第1の課題である「自立する芽」を撒いておくことが大事だろうと思っています。

そうした本当に困っている人々の現実を、6日間、垣間見てきた勇気あるお嬢さん、柳沢由衣さんのお話を聞く例会です。ご期待ください

## ◇幹事報告◇

- 以下の文書を受領いたしました。
  - ①ウィークリー（大津中央・諏訪）
  - ②クラブ計画書・報告書（岡谷）
  - ③7/24 インターアクト地区大会報告書
  - ④6/5 ローターアクト地区大会報告書
  - ⑤諏訪湖浄化推進協議会 30周年記念式典が12/12に開催されます。社会奉仕委員会にて対応を御願ひします。
- 連絡事項
  - ①会費の納入は振込料免除（諏訪信用金庫扱いの場合）です。振込料を支払われた方はお申し出下さい。諏訪信用金庫殿にお伝え致します。
  - ②本日の理事会にて10月例会計画が決定いたしましたのでfax連絡を行ないます。
  - ③11/6・7地区大会へは乗用車相乗りにて参加を御願ひします。後日調査表を配布いたします。
  - ④食事の無駄をなくすため欠席の場合は事務局まで連絡をお願いします。

## 1193回例会報告

国際奉仕委員会担当例会

先日セブの私の会社におりましたところ、赤羽委員長から「井戸を掘りたいと言っている娘がいるけれど」と電話がありました。前回セブの子供に絵を描いてもらいましたが、その絵を城北小学校にお届けした関係から本日卓話をいただく柳沢由衣さんのお母さんから「娘がセブで穴掘りのお手伝いをしたいと言っている」というお話をいただいたようです。

井戸掘りはすでに終わっておりましたので、私たちがお世話になっているアリタさんが行っているディケアセンターのお手伝いをさせていただけるよう手



配をいたしました。アリタさんも大変喜んで「そうしたボランティアの方は私のお客さんとして迎える」と言っていただき今回の6日間という短い期間でしたがボランティアが実現しました。

これも諏訪湖ロータリーの国際奉仕の成果の一つと考え、柳沢由衣さんのお話をお聞きしたいと思います。

西澤賢二

## 「国際社会への第一歩」

諏訪二葉高校三年 柳沢由衣

6年前、トルコへ旅行に行った際、

「世界には貧しい子どもがいる」と実感する出来事がありました。それは小さな子どもが、観光客相手に「1ドル50セント」と片言の日本語で声を掛け、絵はがきを売る姿を間近に見たことです。

この時から、自分の生活の豊かさを実感するとともに、なぜ貧困が生まれるのか、なぜ解決しないのだろうかという疑問を持ち、将来、国際支援のような活動をしたと思うようになりました。そして貧困についてもっと肌で感じ、学び、考えたいと思いましたが、それらを学ぶことはとても難しいことでした。私の周囲には、具体的な貧困というものが無く、テレビや本・インターネットなどで調べても、間接的な知識しか得られず、そこから進めない状況にジレンマを感じていました。そんな中、私は今年の8月10日から6日間、諏訪湖ロータリークラブの方々のご理解とご協力のもと、機会を得て、フィリピン・セブ島でボランティア活動をさせていただきました。

それはセブ島で、私設の保育園を営んでいるALITAさんのお手伝いをするというものでした。セブには保育園・幼稚園に行かせられない貧しい家庭が多く、そうした家庭の子どもたちを集め、二時間ずつ預かって基本的な学習や生活習慣を身につけるという施設です。そこでは1日に、約300人の子どもたちが就学前の基礎的な教育を受けています。

私は何か日本の曲と一緒に歌えたらいいなあと考え、「大きな栗の木の下で」という曲を英語に直し、伴奏と振りを覚えました。また折り紙も子どもたちと一緒に遊べると楽しいだろうと考え、折り紙を持っていきました。

しかし、これらのことを子どもたちとともに楽しむ時間はあまりありませんでした。

保育園では勉強を中心に時間が過ぎていきます。



貴重な二時間という時間の中で先生達も子どもたちもとても熱心に学習に取り組んでいました。先生が「この問題がわかる人？」と聞かれれば多くの子どもたちが積極的に挙手をし、わからない問題は先生に聞いていました。あんなに小さなうちから英語と母国語を学習するということは、とても大変なことなのに、積極的に学習に取り組む姿に高校生の私もびっくりさせられました。

授業終了後は、教室に残っていた子どもたちと小さい頃自分が使っていたクレヨンや、友達からもらった色鉛筆、使わなくなった縄跳びなどを使って遊びました。その時1人の少年が私に絵を描いてくれました。私はそれがとても嬉しく今も部屋に飾っています

日本の子どもたちは学習するのに十分な環境の中、必要な物資を持ちあわせてるのに、学習に対する意欲が十分にあるとは言い難く、また家に帰ればゲームをしたりテレビを見たりなど楽しむための環境も十分あります。しかし、フィリピンには、日本ほど良い環境で勉強できず、限られた物資を使い、1日2時間しか授業を受られない子どもたちがいました。

しかし、このように保育園に行ける子どもはまだ幸せと言えるのかもしれない。



路上に座りこんでミニカーで遊んでいる子どもやとても臭いがいいとはいえない路地裏で地面に寝ころんでいる子どもたちもいました。

家庭の経済的な問題で学校に通うことができない子どもたちがたくさんいると聞いたとき、何不自由なく学校に通えている自分の境遇を当たり前と思てはいけないんだと思い、フィリピンのこのような状況を変えたいと思いました。

市内に出て観光をしていると、3歳位の子どもが手を差し出しながら「マニー、マニー」と言って寄ってきました。その子はボロボロの黒くなった服を着て、通りかかる人に声を掛けては追い払われまた声を掛けては追い払われ、その光景を見て、私はとても悲しく、なんだか寂しくなりました。市内の道路はがたがたであり、ゴミがそこら中に散らかっていて、綺麗に整備されている日本住む私には、これらの光景は衝撃的でした。

これらの経験をふまえて、もう一度「国際支援」について考えてみました。

お金を渡すことは確かに支援になります。しかし、それではいつまでたっても状況は変わらないと思います。自国を豊かにするのは国民自身であり、彼らが自分たちの力で豊かな国作りを目指せるように手助けをすることが「国際支援」なのではないかと思います。

同じ地球人である私たちが、互いに助け合い、支え合い、解決に取り組む社会を作り、皆が幸せになる、本当の共生社会というものを築くことが私の目標です。

柳沢由衣さんの全講演とスライドはホームページへ記載予定です